

第1章 守口市の特性

I 地域特性

本市は、大阪平野のほぼ中央部、淀川の左岸に存在する。南及び西の二方は大阪市に、東は門真市、北は寝屋川市に接して、市域は概ね淀川の沖積による平坦地である。

旧淀川廃川地とこれに続く淀川堤跡(OP8.9m)の地帯がやや高層であるほか、東南に至るに従って低くなっている。地勢よりみて起伏が少なく、層は地表から1m前後が土砂で次に粘土層が約0.5～0.6mあり、以下は砂層であるが深くなるにつれてその程度は大きくなっている。

本市が位置する寝屋川流域は、河川の水面より低い低平地であり、流域の4分の3は雨水が自然に河川に流れ込まない「内水域」となっており、雨水はポンプにより河川へ排水している。

また、府内でもいち早く農村型から都市化、産業化が進んだ都市へと変貌を遂げ、現在は全域が市街化され、市内には京阪電車、Osaka Metro、モノレールが縦横に走り、国道1号、阪神高速道路、近畿自動車道など各都市間を結ぶ主要道路が整備され、交通の要衝となっており、このうち、国道1号、内環状線及び中央環状線は、橋りょう部分を含め耐震化は施されており、万一の大災害の際の他地域からの受援性(救援部隊の受入れ)は高い。

他方、戦前からある集落や、都市計画確立前の高度成長期に農地が急速に宅地化されてきた地域も多く、老朽化した木造建物が密集して建っている密集市街地が2地区(大日・八雲東町地区、東部地区)存在し、その面積は213haとなっている。

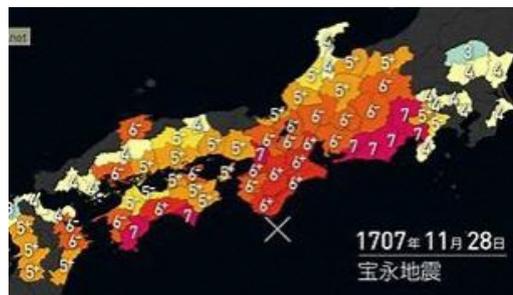


II 災害の歴史

(1) 地震・津波

① 宝永地震（宝永4年(1707年)）

遠州灘から四国までの沖合を震源として発生した海溝型の巨大地震。揺れ・津波による被害ともに極めて大きく、家屋の倒壊は、東海、近畿、四国のほか北陸中国、九州でも発生した。



津波は房総から九州に至る太平洋岸を襲い、大坂へは地震発生から約2時間後に来襲し、安治川や木津川の河口から遡上し、市街地を縦横に走る堀川に沿って甚大な被害を及ぼした。

宝永地震の被害は揺れ・津波によって倒壊(流失)家屋29,000余戸、死者4,900人余と推定されているが、一説には死者が20,000人を超えたとも言われている。

② 安政南海地震（安政元年(1854年)）

紀伊水道から四国にかけての南方海域を震源として発生した海溝型の巨大地震。紀伊半島～四国にかけての太平洋沿岸地域や畿内における揺れ・津波による被害は極めて大きく、大坂へも地震発生から約2時間後に津波が来襲した。津波は宇治川や木津川の河口から



侵入、大坂市内の堀川に沿って遡上し大坂の市街地に甚大な被害を及ぼした。

地震による全国的な被害は全壊家屋20,000余戸、半壊40,000余戸、焼失家屋2,500余戸、流失家屋15,000余戸、死者約30,000人と推定されている。

なお、安政南海地震の前日には、同じく海溝型の巨大地震である安政東海地震が遠州灘沖で発生している。

③ 阪神・淡路大震災（平成7年(1995年)）

震度7の都市直下型の地震。神戸市を中心とした阪神地域および淡路島北部で甚大な被害が発生し、人的被害は、死者 6,434 名、行方不明者3名、負傷者43,792 名に達し、死因の約9割は、家屋、家具類等の倒壊による圧死とされる。



都市施設においては、港湾埠頭の沈下や、鉄道高架橋や高速自動車道路等の倒壊・落橋等が発生。また、ライフラインでは、水道で約123万戸の断水、下水道で8処理場の処理能力に影響が生じ、工業用水道で最大時に289社の受水企業の断水、地震直後の約260万戸の停電、都市ガスでは約86万戸の供給停止、電話においても交換設備の障害により約29万件、家屋の倒壊、ケーブルの焼失等によって約19万3千件の障害が発生した。

本市内での被害は、記録によれば、軽傷者45名、住宅被害 1,074 棟、水道断水、停電、電話の通信混乱など、ライフラインに大きな影響が出た。なお、本市では震度4を観測した。

④ 大阪府北部地震（平成30年(2018年)）

最大震度6弱を大阪市北区、高槻市、枚方市、茨木市、箕面市の5市区で観測。関西の主要鉄道は一時全線で運転を見合わせ、JR を中心に帰宅時間帯になっても復旧が間に合わずに大勢の帰宅困難者が市街にあふれた。また、高層ビルなどのエレベーターでは、中に閉じ込められる被害が頻発した。



本市内での被害は、軽傷者7名、建物被害としては家屋の全壊・半壊はなく、屋根材や外壁、塀の損壊などの一部損壊家屋が708棟に及ぶなど、大きな被害を受けた。なお、本市では震度5弱を観測した。

(2) 風水害

① 台風

・ 室戸台風（昭和9年(1934年)）

風速、潮位ともに超大型のもので、室戸で瞬間的には60m/s を記録したが、降雨は少なかった。西大阪一体は浸水し、死者 2,702 名、行方不明者334名のを超える大災害となり、本市でも全小学校で校舎が倒壊し、教職員2名と35名の児童が亡くなった。

・ ジェーン台風（昭和25年(1950年)）

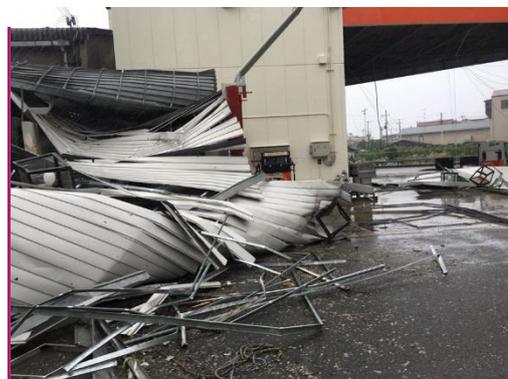
紀伊半島南部と四国の太平洋側に最多雨域があって、その山岳部では400mmを示した。内陸沿岸および大阪湾岸、淀川流域は30mm以下となっており、降水による影響よりも、強風による影響の方が大きく、家屋の倒壊や港内船舶の被害が大きかった。更に、高潮および越波によって大阪市域の30%に相当する56km²におよぶ地域が浸水した。

・ 第2室戸台風（昭和36年(1961年)）

暴風、高潮および波浪等により西大阪、中之島一体、泉北泉南海岸をはじめ、府下各地の人、家屋、港湾施設に甚大な被害を与え、その被害総額は約1,200億円に及んだ。特に大阪湾沿岸では、地盤沈下により機能低下した防潮堤を越波、あるいは溢流し、大きな被害をもたらした。西大阪の内陸河川では、高潮による越波、溢流および一部河川堤防の破損のため、西淀川、港、此花、福島、北、西、大正、西成の西大阪各区のほか、城東区、都島区にわたって浸水し、大阪市の浸水域は31km²に達した。このほか、沿岸各地域にも浸水したところが多く、暴風と波浪によって泉州海岸一体は防潮堤をはじめ公共土木施設等に甚大な被害を被った。

- ・ 平成30年台風第21号（平成30年(2018年)）

台風の接近に伴い、近畿・東海・北陸・北海道を中心に記録的な暴風となり、大阪市で観測した 47.4 m/s の最大瞬間風速は半世紀ぶりの記録となった。守口市においては各地で屋根瓦やスレート材が風で吹き飛ばされ、大枝公園では、風で大木が折れるなど公共施設にも甚大な被害が発生した。また、大規模停電が発生し、国道1号では信号機が停止するなどの事態が起きた。



② 豪雨

- ・ 平成24年8月13日～8月14日豪雨

前線が日本海から西日本に南下し、この前線に向かって暖かく湿った空気が流れ込んだため、大気の状態が非常に不安定となった。このため、14日明け方から朝にかけて近畿地方の中部を中心に猛烈な雨が降った。アメダスでは本市で1時間に最大で115ミリを観測、大阪府枚方市で



14日6時20分までの1時間に91.0ミリを観測するなど、観測史上1位の値を更新した。この豪雨により大阪府で1名が死亡したほか、大阪府、京都などで、床上浸水2,544棟(守口市 650 棟)、床下浸水17,080棟(守口市 7,307 棟)などの被害が発生し、交通機関にも大きな影響が出た。

・ 平成25年8月 24日～25 日豪雨

西日本をゆっくり南下した前線に向かって太平洋高気圧の縁をまわって暖かく湿った空気が流れ込んだため、大気の状態が非常に不安定となり、大阪府内で激しい雷

雨となった。特に、2 時30分から7時と10時から11時30分

にかけて大阪市と東部大阪及び北大阪の南部を中心に非常に激しい雨が降った。アメダスでは降り始めの25日0時から16時までの総雨量は枚方で112. 5ミリ、大阪市中心部で88. 5ミリを観測した。

この影響で大阪府では、床上浸水63棟(守口市なし)、床下浸水1,444棟(守口市 15 棟)が発生したほか道路の冠水などの被害が発生し、交通機関にも大きな影響が出た。

